

『成長と無知』

ヘブル人への手紙 5 章 1~14 節

1. 二つの資格

ヘブルの著者は、キリストの優れたことについて語ってきました。1、2 章では、御使いに勝るイエス、3、4 章では旧約時代の指導者モーセに勝るイエス、そして 5、6 章では旧約時代の宗教的権威である大祭司アロンに勝るイエスが語られます。

本日のヘブル書 5 章は、前の章の「**大祭司**なるイエスに近づくことが安息に入る道である」というテーマをさらに展開させています。既に神はアロンという「**大祭司**」を選んでいたのに、なぜわざわざ御子イエスを「**大祭司**」にされたのか、という疑問に答えています。10 節で前後に分けられます。

前半はまず、「**大祭司**」には二つの資格が必要あることを述べています。第一に、神から任命されなくてはならないことです。第二は、迷っている弱い人に優しく接することができる者であるべきことです。しかし、自分は弱さを身にまとっているので、自分のためにもささげ物をささげなければなりません。実は、ここに人間の大祭司の限界があるのです。

ではキリストの場合はどうなのでしょうか。キリストは、詩篇 2 編に記されているように、神から「**わたしの子**」と言われたのみならず、詩篇 110 編では「**メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である**」とも記されています。キリストは、確かに神から任命された、第一の資格を持つお方でした。

さらに、人間としての弱さゆえにゲッセマネにおいて「**大きな叫び声と涙をもつて祈りと願いをささげ**」られました。人間の弱さを知るという第二の資格を持たれることも明白です。主は多くの苦しみを経験して従順を学ばれ、神に従う人々にとって「**永遠の救いの源**」となられたのです。力強い栄光の「**大祭司**」から一転して、イエス様は、私たちの真の理解者、真の意味で私たちの弱さに同情できる「**大祭司**」として紹介をしています。

イギリスの聖書学者ウィルアム・バークレーは、この箇所の注解で「イエスが罪を犯さなかったという事実は、イエスは我々が想像することもできない罪の深さ、誘惑、攻撃を体験されたということを前提としている。しかも、その罪との戦いは我々の戦いとは比較にならないほど厳しいものであった。なぜなら、我々の場合は、罪が総攻撃をかける前に敗れてしまうから、罪の力がどんなに恐ろしく激しいものであるかを知ることはできない。しかしイエスの場合は、サタンの集中攻撃を受け、しかもそれに耐え抜かれたのである。」と記しています。このような試練を通られたので、イエス様は本当に人間を理解することができ、同情と哀れみと力を示すことができるのです。イエス様は人間と関わるばかりでなく、この世の苦しみを自分の者として担ってくださった方であるので、4 章 16 節で「ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」という奨励が語られたのです。この呼びかけは、祈りを通して私たちは、昨日の罪を覆ってくださる神の「**あわれみを受け**」、今日、そして今の必要を満たしてくれる「**助けを受ける**」ことができるということを示唆しているのです。マタイの福音書 14 章 23 節「**群衆を解散させてから、イエスは祈るために一人で山に登られた。夕方になっても一人でそこにおられた。**」、マルコの福音書 1 章 35 節「**さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。**」ルカの福音書 5 章 16 節「**だが、イエスご自身は寂しいところに退いて祈っておられた。**」とあるように、イエス様ご自身、祈ることの大切さを知つておられ、進んで、熱心に、効果的に祈りの恵みを用いられました。

2. 理解できない問題

後半の 11 節以降でも、著者はもっと解き明かしたかったのですが、「**あなたがたが、聞くことに対して鈍くなっているから**」それが困難であると言います。どういうことでしょうか。これを聞いていた読者の中に何のことと言っているのかさっぱりわからなかった人たちがいたのです。私たちもよくあるでしょう。牧師が一生懸命に説教して

いても、何を言っていることがさっぱりわからないということがあるのではないでしょうか。当時の人们は旧約聖書のことについてはある程度知っていましたが、そういう人们でさえわからなかったというのですから、私たちがわからぬのも自然なことです。そもそも聖書が難しいというのはその内容が難しいということもありますが、それよりもそれがどういうことなのかを体験するのが難しいのです。

問題を三つに分けることができます。

① 懈惰

第一に無知は怠惰によることです。福音の真理に対するうえ渴きと情熱を失ってしまった者に、どうして「**マルキゼデク**の位に等しい」キリストの「**大祭司**」職の深遠な意味を解き明かすことができるのでしょうか。キリスト者の多くは今や「**聞くことに対して鈍くなっている**」。私たちは、しばしば怠け者の心の鈍さや、心を閉ざした人々の偏見とも戦わなければなりません。著者は、まことの「**大祭司**」であるイエス・キリストについて話すべきことがたくさんありますが、それを説き明かすこと、説明することは困難だと言っています。なぜなら、彼らの聞くことに対して鈍くなっていたからです。「**聞くことに対して鈍くなっている**」とはどういうことでしょうか。靈的な面での鈍くなっていることです。若い時には御言葉を聞いて素直に信じることができたのに、だんだん年をとるうちに聞けなくなっているというのです。年をとるにつれていつしか耳が硬くなって、聞き分けることが困難になる、つまり、鈍くなることがあるのです。

この「**聞くことに対して鈍くなっている**」という言葉ですが、「怠慢な」とか、「鈍い」という意味の「ノースロイ」という言葉が使われていて、意味は「心がふさがっている」という意味です。ですから、現代訳では、「あなたがたの心がふさがってしまっている」と訳されています。つまり、この「**聞くことに対して鈍くなっている**」というのは、イエス様を信じて救われたのに、そのすばらしいイエス様を求めるよりも他のことで心が一杯になっていることです。

イエス様は種まきのたとえを話されました。ある人が種を蒔きました。蒔いていると、ある種は道ばたに、また別の種は土の薄い岩地に、また別の種はいばらの中に、もう一つの種は良い地に落ちました。道ばたに落ちた種は、鳥が来て食べてしまいました。土の薄い岩地に落ちた種は、土が深くなかったので、すぐに芽を出しましたが、日が上ると、焼けて枯れてしまいました。根が張っていなかったからです。いばらの中に落ちた種は芽を出し、順調に生長していましたが、あるところまで生長していくといばらが伸びてふさいでしまったので、それ以上は伸びることができませんでした。しかし、良い地に落ちた種は生長し、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結んだのです。「**聞くことに対して鈍くなっている**」というのは、ここで言われている良い地以外の地に蒔かれた種のことです。種は同じでも、それがどこに蒔かれるかによってその結果が全く違ってくるのです。良い地に蒔かれるとは、御言葉を聞いてそれを悟る人のことで、そういう人は多くの実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。しかし、御國の言葉を聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪っていきます。つまり、確かに御言葉を聞きますが、どのような心で聞くかが重要なのです。御言葉を聞いても自分には関係ない話だと思うなら、聞いた御言葉も鳥が来て食べてしまうことになるでしょう。また、最初はいい話だなあと思って聞いていても、それがどういうことなのかを悟ろうとしないと、生活の中に迫害や困難がやってくると、枯れてしまうことになります。また、これはすばらしい話だと信じても、この世の心づかいや富の惑わしが御言葉をふさぐと、実を結ぶことができません。良い地に蒔かれるとは、御言葉を聞くとそれを受け入れ、悟り、この御言葉に生きるのです。どの畑も確かに御言葉を聞くのです。しかし、その聞き方によって結果が違うということです。御言葉を聞いても悟らないと、実を結ぶことはできません。神の御國のすばらしさを味わうことができないのです。

イエス様が話された例えの中に、天の御国は、畑に隠された宝のようなものという話しがあります。その宝を見つけた人はどうするでしょうか。その人は大喜びで家に帰り、持ち物全部を売り払ってその畑を買います。なぜなら、その宝にはそれほどの価値があることを知っているからです。神の国にはそれほどの価値があるのです。あな

たは聖書にそれほどの価値を見出しているでしょうか。イエス・キリストにあるすばらしいいのちにその価値を見出しておられるでしょうか。あなたがどのように受け入れるかによってその結果が決まります。どうか鈍くならないでください。

確かにことは、あなたも神の御言葉を聞いたということです。しかし、その御言葉にどのように応答するかはあなたの信仰の決断にかかっているのです。どうか鈍くならないでください。「**たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。**」とパウロは言いました。

② 成長を拒む

第二に、無知は成長を拒みます。計画性を持った聖書研究や御言葉を学ぶことに背を向けた彼らの成長は完全に停止し、幼子のような状態になっていました。今頃は教師となっていなければならないはずなのに、依然として神の御言葉の初歩をもう一度教えてもらわなければならぬような憐れな状態でした。

ここでのキーワードは「**乳**」です。聖書には、神のみことばを乳飲み子のようにして飲むように勧められています。例えば、ペテロ第一2章2節には、「**生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、靈の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るために**です。」とあります。救われたばかりのキリスト者には、この純粋な、御言葉の「**乳**」を慕い求めるることは大切なことです。それによって成長し、救いを得ることができるからです。救われたばかりのキリスト者が御言葉の「**乳**」を飲まなかったらどうなってしまうでしょうか。栄養失調になって病気になってしまいます。ひどい場合は死に至ることもあります。それだけ、生まれたばかりの乳飲み子にとって御言葉の「**乳**」を慕い求めるることは重要なことなのです。また、お乳ばかりでなく手厚い世話を必要です。毎日おむつを交換したり、お風呂にいれて体を洗ってあげます。風邪などひかないように部屋もできるだけ適切な温度を保ちます。赤ちゃんが成長していくためにはこうした世話がどうしても必要なのです。

しかし、どうでしょう。もし20年経っても同じ状態だったとしたら、それは悲劇ではないでしょうか。もちろん身体に障害があってそのような生活を余儀なくされているというケースもありますが、一般的な成人は牛乳も飲みますが、バランスのとれた食事をとり、栄養の管理に努めます。もしそうしなかったとしたら、それは成人とは言えません。幼子なのです。それは靈的にも同じで、キリスト者も生まれたばかりの時にはミルクを飲んでたくさん栄養を受けますが、大人になるにつれてミルクばかりではなく堅い食べ物も食べて、健康な身体を維持するように努めます。

パウロは、コリントにいるキリスト者に対して、「**兄弟たち。私はあなたがたに、御靈に属する人に対するように語ることができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。**」(Iコリント 3:1~2) と彼らは靈的赤ん坊だと言いました。なぜパウロはそのように言ったのでしょうか。なぜなら、彼らの間にねたみや争いがあったからです。なぜねたみや争いがあったのかというと、彼らが肉に属していたからです。ねたみや争いがあるとしたら、それは肉に属している証拠でした。それは、ノンクリスチヤンと少しも変わりません。そういう人はもう何年も信仰に歩んでいても、神の言葉の初歩をもう一度誰かに教える必要があったのです。キリストを信じて何年経つてもねたみや争いがあるというはどうしてでしょうか。それは御靈に属しているからではなく、肉に属しているからです。それは知識の問題ではなく信仰の問題です。ヘブル書では、それを「**義の教えに通じてはいません。**」と言っています。確かにイエス・キリストが救い主であることを知り、この方を自分の人生の主として受け入れたにもかかわらず、その神に自分を明け渡すことができないのです。まだ自分が中心で、神の言葉に生きることができません。それが肉に属すると言われている人のことです。だから、ねたみや争いが生じるのです。いつまでも肉に属しているかのような歩みをするのです。

それはねたみや争いに限らず、たとえば、なかなか神に信頼することができないというのも同じです。いつも不安で、思い煩いから解放されないと、すぐに人を傷つけるようなことを言ってしまったり、やったりしてしま

う。私たちは不完全な者ですから、キリストを信じても直ぐにそのようなことをしてしまう弱さがありますが、ここで言う弱さとは本質的に違います。肉に属しているのか、それとも御靈に属しているのかということです。自分の思い通りにいかないとすぐに不平不満をぶちまけてしまうこともあります。御言葉に生きることができないのです。そういう人は義の教えに通じてはいないのです。

この「**義の教えに通じてはいません。**」というのは、現代訳を見ると、「神の御心についてのすばらしい教えを味わうことができない」と訳しています。神の御心についてのすばらしい教えを味わうことができないのです。聖書の中には神のすばらしい約束がたくさんあります。それなのに、そのすばらしい教えを体験することができないというのです。義の教えに通じていないからです。自分はもう何でもわかっていると誤解しているため、学ぶ必要はないし、どんなに聞いても、「あっ、それは前に聞いたことがある」とか、「あ、私はちゃんとやっている」というレベルに留まるため、それ以上、神の恵みを味わうことができないのです。

その体験というのは、いつも信仰によります。この書の 11 章には、信仰によって生きた人たちの証が紹介されていますが、その特徴は何かというと、信仰によって生きたということです。信仰を体験したのです。11 章 7 節には「**信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神から警告を受けたときに、恐れかしこんで家族の救いのために箱舟を造り、その信仰によって世を罪ありとし、信仰による義を受け継ぐ者となりました。**」とあります。まだ全く雨が降らなかった時代、ノアは神から箱舟を造るようにと言われたとき、彼はその言葉に従って箱舟を作りました。神からそのように警告を受けたからです。だから、彼は神を畏れかしこんで、自分と家族のために箱舟を造り、その中に入って救われたのです。周りの人たちから見たらバカじゃないかと思われたでしょう。雨が降る気配は全くありませんでした。降ったとしてもそんなに大きな船を造っていったい何になるというのでしょうか。でもノアは箱舟を造りました。なぜでしょうか。ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、それを信じたからです。11 章 1 節に「**さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。**」とあります。見えるものを信じることは誰にでもできます。大切なことは、まだ見ていないものを信じることです。信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものだからです。ノアはまだ見ていませんでしたが、神の言われた言葉を信じたのです。それが信仰です。

ですから、信仰とは知識ではなくて体験なのです。もちろん、知識も大切ですが、そこに留まっているだけではだめなのです。神の御心を知ったら、それを行わなければなりません。それが信仰です。そこで私たちは神の御心についての教えを味わうことができるのです。そこには神の恵みが溢れているのです。それを体験することができるのです。

③ 混乱

第三は、無知は混乱をもたらします。神の教えに精通していなかったために、彼らは教理、倫理、靈性等の具体的諸問題にぶつかった時、それをどう判断し、どのように処理したらよいのか見当がつきませんでした。「**善と悪を見分ける**」(14 節) ことができなくなってしまったのです。

読者は、本当は教師になっていなければならないのに、まだ乳を飲んでいるような幼子だと、厳しい口調で言っています。さらに次の 6 章でも警告を続けた後、やっと 7 章から本論に戻ります。そこまで言わなければならぬほど、重要なことだからです。

私たちも、ヘブル書がここで教える心理をしっかり消化できる大人のキリスト者であるかどうか、自ら正直に顧みなければなりません。主イエスが大祭司であることを理解するのは、決してたやすいことではないからです。聖書の物語をただ楽しむだけ、あるいは聖書の言葉をお守りのように考える者ではなく、主イエスがどのような方かをさらに深く知る者となろうではありませんか。